

発表題目：「ね」の機能再考―“矛盾の常在性”の観点から―

発表者氏名：^{トシ}修 ^イ一

所属：広島大学

1. 問題提起

- ・「ね」の機能は、“話し手と聞き手の情報が一致するという話し手の想定・聞き手に情報があるという話し手の想定”という話し手と聞き手の情報伝達の観点でのものだと考えられていた(宮崎 2002)。しかしその後、“相互知識のパラドクス”が問題視され、「ね」の意味記述を話し手内部の情報処理の観点から行い、聞き手の概念が排除されるようになってきた。田窪・金水(1996)・金水(1998)などの“談話管理理論”のアプローチは代表的であり、「ね」の機能を「命題の妥当性を計算中」のマーカ―と主張
- ・問題点：“命題の妥当性を計算中”という主張が有意義である前提は、話し手内部の計算には、“計算不要”“計算中”“計算済み”という3つが相互排他的な関係にあること。しかし氏らは、(1)は「いかなる自己確認、自己説得を経てもこの解答しか出て来ない」という含意から強い拒否拒絶の意味が生じていると説明しているが、これでは(1)の「ね」は“計算済み”を表していることになり、“計算中”ではないことになる

(1)A: 手伝ってくれよ。

B: 俺は、いやだね。

- ・筆者はやはり聞き手の観点から「ね」を説明することが可能であると主張する。しかし“相互知識のパラドクス”は確かに説明しなければならない。本発表では、“矛盾の常在性”という概念から“相互知識のパラドクス”の問題の解決を求め、その上で「ね」の機能への説明を試みる

2. “矛盾の常在性”

- ・“矛盾の常在性”とは、矛盾性は人間の本質的属性であるため、人間の社会生活のあらゆる面に矛盾性が見られるという主張である。その根底にあるのは、想像する能力はあるが想像の対象を確認する能力がないという人間の認知能力の矛盾性である。矛盾性は解決不可能であるため、矛盾への対処法は二つしかない。①無視：そもそも意識しないか、もしくは強引に無い物にする・社会的タブーにする(= “大きな矛盾無視”)。対処法としては主流的。②矛盾をマークする：矛盾解決の実質的不可能性を背景に、自らが矛盾の存在を意識しているのを示すことによって、話し手と聞き手の合意の下で、当該会話においてのみ成立する“小さな矛盾無視”を構築する。結局は無視である
- ・断り表現は基本的に小さな矛盾無視を行うコミュニケーション装置である

(2) ちょっと言っているのか分からないけど…

- ・(2)の明示的意味は達成できない。即ち、(2)はある発言の妥当性を確認するが、発言が行われると(2)は無意味なものになるが、発言を行わずにその妥当性を確認することは永

遠にできない。(2)の本当の機能は、このジレンマをマークすること。矛盾性をマークする行為は本質的に、主体が矛盾性を無視すると強制的に規定する行為である。(2)の場合では即ち、“今からの発言はあなたにとって不快かもしれないが、する必要があるため、これをマークすることにより、当該会話において不快に思わせる性質を強制的にキャンセルするので付き合ってください”という具合

- ・ジレンマやパラドクスなどは、本質的には“矛盾の常在性”の結果(e. g. “囚人のジレンマ”も人間の認知能力の矛盾性の結果)。社会で生きることは、常にジレンマやパラドクスを無視し続けるプロセスである。故に“相互知識のパラドクス”も無視すれば良い。実際、“相互知識のパラドクス”は殆どの場合は無視される(裏を返せば、何らかの思惑で追求したいのならばいくらでも追求することができ、不毛な言い争いの種となる)

3. 2つの情報伝達モード

- ・“情報告げ”と“情報共有”という2つの情報伝達モードが存在する。この2つの情報伝達モードの違いは強制的な規定の結果
- ・情報告げ：情報を聞き手に告げる情報伝達モード。情報伝達モードのデフォルト値
- ・情報共有：情報を聞き手と共有する情報伝達モード

4. 「よ」の機能

- ・「よ」は、命題部の情報と関連する色々な推論を促すという強力な発話の力を産出できる(田窪・金水 1996、中崎 2005)

(3)a. 雨が降ってる。

b. 雨が降ってるよ。(cf. 田窪・金水 1996)

- ・「よ」の機能は、本来デフォルトとして存在する情報告げを明示すること。故に実質的には量の原理への意図的違反ということになり、自然に強力な発話の力を発揮できる

5. 「ね」の機能

- ・「ね」の本質を(4)に規定する

(4)「ね」は厳格な情報共有マーカである。

- ・(4)において最も重要なキーワードは“厳格”である。“厳格な情報共有”とは、情報告げを否定し、無条件かつ強制的に情報伝達モードを情報共有に上書きすることである。このプロセスを通して、「ね」の語用的効果が産出される
- ・「ね」の根本的な機能は、“情報告げの矛盾”をマークすること
- ・“情報告げの矛盾”：情報告げは必要なのに聞き手が余計な侵害を感じかねないこと。矛盾性に由来するため、この侵害は矛盾のマークによりキャンセルできる。
- ・ただし、「ね」が産出し得る語用的効果は全て“情報告げの矛盾”のマークと関わるというわけではない。厳格な情報共有により“情報告げの矛盾”をマークすることは「ね」の存在理由であり、そしてこれを原理とする「ね」が実際の言語使用において他の語用的効果も産出する可能性があり、具体的なケーススタディが必要

5.1. 「ね」の他者に対する侵害を軽減する効果

- ・「ね」は“情報告げの矛盾”をマークすることにより聞き手への配慮を示し、表現を和らげる効果をもたらすことができる

(5)a. ここに置いておきます。

b. ここに置いておきますね。

- ・事柄がなく、聞き手に対して気持ちを表す場合は、「ね」がもたらす意味の違いは更に縮小し、気持ちを持っていることを告げる場合は、気持ちの表現はより純粋であるのに対して、「ね」を付けるとその純粋性が若干弱まり、気持ちの度合いは若干軽くなる程度と言って良い。一方、気持ちを丁重に伝達する丁寧体の命題部は「ね」とは相性が悪い

(6)a. ありがとう。

b. ありがとうね。

c. *ありがとうございますね。

(7)a. ごめん。

b. ごめんね。

5.2. 「ね」が命令文に用いられる場合

- ・行動の即実行を要求する命令文と「ね」との相性が悪く、逆に即実行ではなく、行動の実行を一定の条件で約束する場合、「ね」を付ける義務性が高くなる(宮崎 2002)

(8)a. *起きろね！

b. *起きなさいね！(cf. 宮崎 2002)

(9)a. こっちおいで！

b. ?こっちおいでね！(作例)

(10)A: 手伝いましょうか？

B: すみません。ちょっと手を貸して {ください/*くださいね}。(cf. 宮崎 2002)

(11) うまく行かないときは、手を貸して {?ください/くださいね}。(cf. 宮崎 2002)

- ・命令、依頼文に「ね」を付けると、聞き手に行動指示を告げるのではなく、行動指示を共有している意味になるが、行動の強制的命令は現実性が非常に強く、聞き手にとって可能な選択は“即座に指示に従う vs. 従わない”という二元に狭められ、そこに“厳格な情報共有”という空白な区分を入れる余地はない。更に言うとならば、情報告げの矛盾をマークする行動は意味を成さないということである
- ・聞き手に行動指示を告げることと行動指示を共有することは、二つの場合で違いが生じる。①「ね」を付けると、行動の即実行ではなく、条件が満足次第行動を行うという約束を共有する意味が推論される；②形式上では命令・依頼文になっているが、意味的には聞き手を命令するというより行動を勧める場合((9))、聞き手にとって可能な選択はそれほど厳しくないため、情報告げを情報共有に上書きする余地は一応残っている

(9)たくさん食べてね。

5.3. 「ね」の情報価値の必須性を減少させる効果

- ・ 厳格な情報共有は情報告げを否定するため、そもそも情報価値が必須とされていないという特徴がある。情報は既に共有されていると言っても、気持ちはまだ共有できる。気持ちの共有は情報価値を必須としない。情報価値がない場合では、厳格な情報共有の語用的効果は気持ちの共有、共感の要請、更に連帯感の確認や維持などに転じる

(13)A: 天気が良いですね。

B: そうです {ね/? φ/? よね}。良い天気です {ね/? φ/? よね}。

- ・ 情報価値が必須ではないことが更に進展した結果、情報自体も必須ではなくなることになり、「ね」は命題部なしでも用いられるようになる。厳格な情報共有というのは、あらゆる場合でも強制的に何らかの形の情報共有が読み取られるということである。命題部なしに用いられる場合は、情報が存在しないため、相槌用法と類似的に、語用的効果は情報共有から気持ちを共有すること・共感を求めること・連帯感を提起すること・聞き手の注意を喚起することなどに転じる
- ・ 情報価値の必須性の減少と関連するもう一つの語用的効果は、情報告げを否定した情報共有では、情報は参考程度になるため、情報の妥当性についての責任性が弱まること。故に、情報告げ文に「ね」を付けると、情報の妥当性に対する要求を緩めた妥協的な表現になる。逆に妥協が必要ない場合「ね」は不要

(14)A: いま何時ですか。

B: ええと、7時ですね。

(15)*私の名前は田中ですね。(cf. 金水 1998)

5.4. 情報伝達構造における「ね」の位置づけ

- ・ 「ね」は、他の意味構造の上に厳格な情報共有を上書きするプロセスを通してその語用的効果を産出するため、常に文の意味構造全体の最外層に来なければならない。つまり「ね」は常に文の最後に来るわけである
- ・ この特徴を前述した「ね」は情報自体を必須としない特徴と併せてみると、「ね」は更に他の自立不可(=命題部を必須とする)マーカーに厳格な情報共有を上書きし、それらのマーカーに自立性を付与する機能を持つことが分かる
- ・ 情報告げマーカー「よ」は情報が必須であるが、「ね」は自立性を「よ」に付与できる

(16)a. {*よ/ね}。

b. {*だよ/*ですよ/だよね/ですよね}。

5.5. 「よね」の機能

- ・ 「ね」が情報伝達構造の最外層に来る(e.g 「よね」「*ねよ」)
- ・ 「よね」の成立過程: 「よ」の情報告げ機能の外で「ね」で厳格な情報共有という情報伝達モードを上書きする

- ・“情報告げ”は話し手が聞き手の知識について判断した上での発話行為であり、聞き手の知識には妥当な情報がない場合は「よ」、あるいは別の言語化形式という二元論的なものであるが、情報の妥当性を決定する権力は実際は聞き手にある、もしくは聞き手のみが情報の妥当性を把握している場合もある

(17) 学生時代は楽しかったよね。(中田 2017)

- ・もし“学生時代は楽しかった”という命題の主体は話し手自身ならば、「よ」で情報告げを行って問題ないが、命題の主体は話し手と聞き手両方なのであれば、情報としての妥当性は実は聞き手が決めるということになる。こういう場合は、話し手が情報告げを行う際、同時に聞き手に情報の妥当性を確認する必要も出てくる
- ・「よね」の機能：情報の妥当性を聞き手に求める必要がある場合、それを妥当的なものとして告げて良いかを聞き手に確認する
- ・この規定は情報は聞き手の知識に存在していることを要件とするのではなく、情報の妥当性は聞き手によって決まることを要件とするため、関連性理論との親和性も良い

(18) A fact is *manifest* to an individual at a given time if and only if he is capable at that time of representing it mentally and accepting its representation as true or probably true. (Wilson & Sperber, 1995:39)

- ・「よね」は話し手が情報の妥当性に確信を持たない場合に用いられるわけではない

(19) A: いま何時ですか。

B: ええと、7時です {ね/*よね}。(=14)

- ・(19)は、情報の妥当性は聞き手が決めるわけでもないし、聞き手に情報の妥当性を求めているわけでもない。故に「よね」ではなく「ね」
- ・誤解されやすい点だが、「よね」の情報の妥当性を聞き手に確認する含意は「ね」の結果だが、「よね」と「ね」の形式上の違いから、その含意は「よ」に由来しているのではないかと思われるかもしれない。実は、情報の妥当性を要求する「よ」が“情報共有して良いか”という「ね」の可能な含意の一部を喚起し、そして情報の妥当性が聞き手によって決まる場合、情報の妥当性を聞き手に確認する含意は「ね」によって産出される
- ・普通の疑問文でも勿論情報確認ができるが、普通の疑問文では話し手が情報に対する態度は中立的であるのに対して、「よね」では、話し手自身は既に情報の妥当性に対して肯定的な態度を持っており、ただその妥当性を聞き手にも確認している
- ・「ね」を厳格な情報共有のマーカーとするという解釈のもう一つの利点は、特に若年層に見られる特殊な「だよね/ですよね」用法も説明できること

(20) A: あたし、あんたのこと好きなんだよね。

B: …は？

A: だから、あんたのことが好きなの。(https://www.youtube.com/watch?v=W9gTF74cZ0Q&t=302s)

(21)A: お前すげえ疲れてるようだけど、大丈夫？

B: いやなんか、最近やけに疲れんだよね。(https://www.bilibili.com/video/BV1as41167pV?from=search&seid=10871030271919300496)

- ・この用法の論理：話し手は「だよね/ですよね」を解体し、各マーカ―の機能の核心まで遡り、その核心的機能を以て「だよね/ですよね」を再構築するという原点遡及的なプロセス。「よ」の明示的情報告げの機能を用いた上で、更に「ね」の厳格な情報共有の機能を用いることにより、聞き手に情報告げを行いながらも情報告げ性を弱め、聞き手への侵害をキャンセルしたり、恥ずかしさを紛らしたりするなどの語用的効果を醸し出すと考えられる。実際醸し出したい語用的効果はどのようなものなのかに関しては、一定の解釈上の自由があるが、その根底的な動機づけは以上のものに帰結する

5.6. 「ね」の機能についての補足説明

- ・(1)を振り返る

(22)A: 手伝ってくれよ。

B: 俺は、いやだね。(=1)

- ・筆者は田窪・金水によるこの強い拒否拒絶の「ね」の含意についての指摘を否定しない
- ・厳格な情報共有の「ね」は、無標的情報告げ（「俺は、いやだ」）でもなければ、有標的情報告げ（「俺は、いやだよ」）でもない。拒否的態度には、話し手の何らかの負の感情が伴う場合が多く、逆にいうと、その負の感情を解消できれば拒否的態度が変わる可能性はある。しかし「ね」を用いると、“充分な自己確認・自己説得を経て、感情的なものを取り除いた上で落ち着いた状態で拒否し、これ以上の検討を受け付けない”という純化された拒否的態度を無味乾燥に聞き手に共有することになる

参考文献

- Wilson, Deirdre & Sperber, Dan (1995). *Relevance: Communication and Cognition* (Second Edition). Blackwell Publishers.
- 金水敏 (1998) 「談話管理理論に基づく「よ」「ね」「よね」の研究」堂下修司・新美康永・白井克彦・田中穂積・溝口理一郎共編『音声による人間と機械の対話』オーム社。
- 田窪行則・金水敏 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3(3). pp. 59-74.
- 中崎崇 (2005) 「終助詞「ヨ」の機能に関する一考察」『語用論研究』7. pp. 75-92.
- 中田一志 (2017) 「終助詞「よね」の機能：直接形を中心に」『日本語・日本文化研究』27. pp. 1-15.
- 宮崎和人 (2002) 「終助辞「ネ」と「ナ」」『阪大日本語研究』14. pp. 1-19.